茨城県水海道方言

茨城県方言区画図

【茨城県の方言区画】茨城県内で話されている方言には 3 区分説（田口 1939）と 6 区分説（読売新聞社 1967）がある。3 区分説では、北部、西南部、南部に区分される。6 区分説では、県北、浜言葉、県央、霞ヶ浦北浦周辺、県南西、利根川流域に区分される。県北、県南西、利根川流域の方言は、隣接する他県で話されている方言と特徴を共有する。

県北ではタッペ（霜柱）など東北地方と共通の語彙が見られる他、文法の面でも隣接する福島県の方言と共通する特徴を示す。県南西の方言は、格体系が埼玉県東部の方言のそれと共通である。利根川流域の方言は動詞の活用などで千葉県で話されている方言と共通の特徴を示す。茨城県内で話されている方言の多くは無アクセントである。

茨城県内の方言で共通してみられる特徴としては、母音間の/t, k/が有声化すること（「肌」と「旗」はともに[hada]）、無声阻害音の前で「ジ、ビ、ズ、ブ」が無声化すること（「座布団」は[dzapu̥ton]と発音される）、推量の表現に「ペ／ベ」を用いる点が挙げられる。これらの特徴は東北地方の方言にも見られるものである。一方、東北地方の多くの方言で見られる前鼻音子音は存在しない。

【水海道方言について】本稿で取り上げる水海道方言は、旧・水海道市（現在は常総市に編入されている）を中心とする地域で話されている県南西方言の一つである。この方言は、細分化された格体系と複雑な音韻プロセスの相互作用によって特徴づけられる。詳細は佐々木（2004）を参照されたい。

1910 年に朝日新聞に掲載された長塚節の小説『土』の会話部分は、この地域の方言の特徴を反映している。

この方言の音韻特徴および文法特徴は若年層にもある程度継承されている。佐々木（2011）によると中学生の伝統方言の継承率は、動詞形態法で平均 12.8%、名詞形態法で平均 6.0%、音韻特徴で平均 7.4%である。

【表記について】母音間の/t, k/の有声化は表記に反映させない。

【調査概要】本稿の記述は、旧・水海道市および旧・石毛町（ともに常総市に編入）に生育した高年層話者への聞き取り調査で得たデータに基づくものである。また、カタカナ書きの用例は現在の伝統方言話者から筆者が調査で得たものである。それ以外の例は『土』からの引用である。用例は春陽堂版の表記で示した。ルビは丸カッコで示してある。共通語訳は筆者による。

茨城県水海道方言の活用表

《動詞》

		多段型　書く	一段型　見る	来る	する
終止類	断定非過去	カク	ミル	クル	スル
	断定過去	カエタ	ミタ	キタ	シタ
	命令	カケ	ミロ	コー	シロ
	禁止	カクナ	ミンナ	クンナ	スンナ
	意志	カクベ	ミベー ミッペ	クベー クッペ	スベー スッペ
	推量	カクベ	ミベー ミッペ	クベー クッペ	スベー スッペ
	否定推量	カカメー	ミメー	キメー	シメー
接続類	連体非過去	カク	ミル	クル	スル
	連体過去	カエタ	ミタ	キタ	シタ
	中止	カエテ	ミテ	キテ	シテ
	仮定	カケバ カエタラ	ミレバ ミタラ	クレバ キタラ	スレバ シタラ
	継起	カエタックレ	ミタックレ	キタックレ	シタックレ
派生類	否定	カカネー	ミネー	キネー	シネー
	丁寧	（該当形　欠）	（該当形　欠）	（該当形　欠）	（該当形　欠）
	使役	カカセル	ミラセル	キラセル	サセル
	受身	カカレル	ミラレル	キラレル	サレル
	可能	カケル	ミラレル	キラレル	デキル
	尊敬	（該当形　欠）	（該当形　欠）	（該当形　欠）	（該当形　欠）
	継続	カエテル	ミテル	キテル	シテル
	希望	カキテー	ミテー	キテー	シテー
	のだ	カクンダ	ミンダ	クンダ	スンダ

多段型動詞の基幹音便形

語幹末子音	語例		活用形例（過去形）	作り方
k	書く	kak·u	カエ-タ	k を e にする。aruk·u は k を Q（促音）にし「アルッ-タ」となる場合がある。
g	嗅ぐ	kag·u	カエ-ダ～ カン-ダ	g を e にする。または、g を N（撥音）にする。-タが-ダになる。
s	出す	das·u	ダシ-タ	音便形をとらず、基幹イ段形を用いる。
t	立つ	taz·u	タッ-タ	t を Q（促音）にする。
n	死ぬ	sin·u	シン-ダ	n を N（撥音）にする。-タが-ダになる。
b	飛ぶ	tob·u	トン-ダ	b を N（撥音）にする。-タが-ダになる。
m	飲む	nom·u	ノン-ダ	m を N（撥音）にする。-タが-ダになる。
r	切る	kir·u	キッ-タ	r を Q（促音）にする。
(w)/ø	買う	kaa	カッ-タ	音声的に実現しない/w/を Q（促音）にする。

《形容詞・形容名詞述語・名詞述語》

		赤い	静か（だ）	学生［ガクセー］（だ）
終止類	断定非過去	アカエ	シズカダ	学生ダ
	断定過去	アカカッタ アカカッケ	シズカダッタ シズカダッケ	学生ダッタ 学生ダッケ
	推量	アカカッペ	シズカダッペ	学生ダッペ
	否定推量	アカカンメー	シズカジャンメー	学生ジャンメー
接続類	連体非過去	アカエ	シズカナ	学生ノ
	連体過去	アカカッタ	シズカダッタ	学生ダッタ
	中止	アカク アカクテ	シズカデ	学生デ
	仮定	アカケレバ アカエケレ アカカッタックレ	シズカダラ	学生ダラ
派生類	否定	アカカネー	シズカジャネー シズカデネー	学生ジャネー 学生デネー
	なる	アカクナル	シズカニナル	学生ニナル
	丁寧	（該当形　欠）	（該当形　欠）	（該当形　欠）
	のだ	アカエンダ	シズカナンダ	学生ナンダ

1. 動詞の活用の特徴

(1)活用型と語類の対応

規則的な活用型として基幹多段型(以下「多段型」)と基幹一段型（以下「一段型」）がある。おおよそ、多段型にはa類(「書く」・「居る」・「死ぬ」類) 動詞、一段型にはb類（「見る」・「起きる」・「開ける」類）動詞が所属する。

多段型の基幹にはア・イ・ウ・エ段の4形、および、音便形がある。「カク」（書く）の場合、カカ-ネー(kak·a-neR)、カキ-テー(kak·i-teR)、カク(kak·u)、カケ（kak·e)、カエ-タ（kae-ta）など。また、語幹末子音には、k（カ行)、g（ガ行)、s（サ行)、t（タ行)、n（ナ行)、b（バ行)、m（マ行)、r（ラ行)、w（ワ行）がある。ただし後述するとおり、tとwは音声的には実現しない。語例は表「多段型動詞の基幹音便形」を参照。

一段型には、ミ-ル（mi-ru)、オキ-ル（oki-ru）など基幹がイ段の動詞と、ネ-ル(ne-ru)、アケ-ル(ake-ru)など基幹がエ段の動詞がある。一段型の動詞は、「ミル」を例にすると、断定非過去形ミ-ル（mi-ru)、仮定形ミ-レバ（mi-reba)、受身形・可能形ミ-ラレ（mi-rare）のほか、使役形ミ-ラセ（mi-rase）でもrで始まる接辞が付き、多段型のr語幹動詞に対応した形となる。共通語では、接辞の先頭に現れる子音（いわゆる連結子音)に、r(断定非過去kak-u, mi-ru、受身 kak-are, mi-rare)、s（使役 kak-ase, mi-sase)、j（意志 kak-oR、mi-joR）の3種類があるが、水海道方言では、rだけである。

不規則な活用をする動詞に「クル」(来る）と「スル」(為る）がある。ともに一段型に近い活用をするが、「クル」は、キ-タ（k·i-ta)、ク-ル（k·u-ru)、コー（k·oR）などのように、基幹が「キ」「ク」「コ」の3段にわたる。本資料集の他の稿のように使役形・受身形の「サ」も基幹とみなすなら「スル」は、サ-レル（s·a-reru)、シ-タ（s·i-ta)、ス-ル（s·u-ru）などのように、基幹が「サ」「シ」「ス」の3段にわたる。「クル」の基幹がキ、ク、コの3種類である点は共通語と同じだが、キとコの用いられ方が共通語と

は異なる。共通語ではコが否定形と命令形の両方で用いられるが、水海道方言では命令形でだけ用いられる。否定接尾辞ネーや否定推量接尾辞メーはキに後接する。この方言の「来る」は学校文法で言うところの未然形と連用形が同形になっている。

多段型動詞では、共通語とは異なる基幹音便形と他の語形の関係が見られる。語幹末子音が軟口蓋子音の場合、エ音便が生じるが、これは共通語のイ音便と並行的な現象である。語幹末子音が/k/である「歩く」aruk-はエ音便を起こす場合と促音便を起こす場合がある。共通語の「行く」は語幹末子音が/k/であるが、この方言の対応する動詞は基幹音便形では促音便が生じるものの（「行った」[etta]）、それ以外の語形では語幹末子音の音声的実現が[ŋ]である（否定形[eŋane], 断定・連体非過去[eŋɯ]など）である。この方言の語中の[ŋ]は/g/の音声的実現なので、促音便を起こす形式も含めて分析するには、{eg-, et-}という二つの語幹を立てる必要がある。語幹末子音が/g/の動詞がエ音便と撥音便で揺れがあるのは、/g/が鼻濁音で実現することと関係がある可能性がある。

語幹末子音が/n, m, b/の場合、基幹音便形では撥音便が生じる。

共通語で語幹末子音が/t/の動詞に対応する動詞も基幹音便形と他の語形の対応関係が複雑である。「立つ」など多段型 t の動詞は、基幹音便形では「タッタ」など促音便となるが、それ以外の語形では、否定形「タザネ」[tazane]、 断定・連体非過去形「タズ」[tazɯ]など、語幹末子音が有声摩擦音[z]となる。断定・連体非過去形が[tazɯ]となるのは、ツが母音間で有声化するという音韻規則で説明できるが、否定形は語幹末子音を t とすると音韻規則では説明できない。宮島（1961）は、否定形などで語幹末子音が[z]で実現するのは断定・連体非過去の音形に引きずられたためであるとしている。

共通語で語幹末子音が/w/の動詞に対応する動詞は、宮島（1961）では「ア変」動詞と呼ばれている。共通語で語幹末子音/w/が音声的に実現するのは、否定形や使役形といった語幹末子音に/a/が後続する語形においてである。一方、水海道方言ではこれらの語形においても/w/は現れない（否定形カーネー、使役形カーセル）。しかし、このことは、「買う」が一段型動詞になったことを意味しない。一段型動詞では、非過去接尾辞や使役接尾辞として連結子音で始まる-ru, -rase が期待されるが、「買う」では連結子音で始まる接尾辞の異形態は用いられない。

(2)各活用形の特徴

〈断定非過去形〉

動詞の断定非過去形は連体非過去形と同形である。ア変動詞は母音/a/で終わるが（「買う」カー）、他の動詞は/u/で終わる。

〈断定過去形〉

動詞の断定過去形は連体過去形と同形である。語幹末子音が/s/の動詞以外の多段型動詞は、基幹音便形に過去接尾辞が後接し、一段型動詞は基幹（＝語幹）に過去接尾辞が後接する。音便の形式については基幹音便形の表を参照されたい。「来る」「する」は、それぞれキ、シに過去接尾辞が後接する。過去形に推量の接尾辞ペもしくは回想の接尾辞ケが後接する際に促音便が生じる(ヨンダッペ、ヨンダッケ)。

〈命令形〉

多段型動詞の命令形は基幹エ段形(カケ)をとり、一段型は基幹にロを付加した形式（ミロ）をとる。「する」はイ段の基幹にロを付加した形をとる（シロ)。「来る」の命令形はコーである。この方言の「来る」でオ段の形式が用いられるのは命令形だけである。

- 戸棚へでも入（せ）えて<u>置け</u>（戸棚にでも入れておけ。）［土］
- そうら<u>見ろ</u>（そうら見ろ。）［土］
- 明日行つたら又薬貰つて<u>来う</u>（明日言ったらまた薬をもらってこい。）［土］
- あつちへ行つてからに<u>しろ</u>（あっちにいってからにしろ。）［土］

〈禁止形〉

禁止形は断定非過去形にナが付く形式である。断定・連体非過去形がルで終わる動詞の場合、活用型の違いにかかわらず、ルが撥音になる。断定・連体非過去形末尾のルが促音や撥音になる現象は、助詞が断定・連体非過去形に後接する環境で広く見られる（トンノ「とるの」断定・連体非過去形=準体助詞、トット「とると、とるぞ」断定・連体非過去形=接続助詞/終助詞)。

〈意志形〉

動詞の意志形は推量形と同形である。多段型動詞では断定・連体非過去形にペ／ベが後接する。一方、一段型動詞の場合イ段またはエ段の基幹に「ベ」が後接する。「来る」と「すべ」の場合、古典語の終止形の基幹に「ベ」が後接する。意志形に助詞が後接しない場合、ペ／ベが長音化することがある。多段型動詞で断定・連体非過去形がルで終わる場合、ペが後接する。

・雑炊でも拵えべと思つてたのよ（雑炊でも作ろうと思っていたのよ。）［土］
・俺ら明日川向さ行つて来べと思ふんだ（俺たちは明日川向こうに行ってこようと思うんだ。）［土］
・さうかそんぢやさうすべよ（そうかそれではそうしようよ。）［土］
・よきげ此煮てやつぺか（与吉にこれを煮てやろうか。）［土］
・銭はみんなおめえげ遣つて置くべ（お金はみんなお前にやっておこう。）［土］

〈推量形〉

推量形は意志形と同形である。過去推量を表す場合は、カエタッペなど断定・連体過去形にペが接続する。

・爺はどうしたつぺ（お祖父さんはどうしたんだろう。）［土］

〈否定推量形〉

多段型動詞はア段に、一段型動詞は基幹に、「来る」はキに、「する」はシに否定推量接尾辞メーが付く。否定推量接尾辞に先行する形式は後述する否定接尾辞ネーのそれと同じである。

・房州砂でも何でも構あめえ（房州砂でも何でもかまわないだろう。）［土］
・忘れめえな爺は（忘れないだろうな、お祖父さんは。）［土］
・干（ほし）過ぎやしめえかと思つて心配（しんぺえ）してんだからよ（干しすぎはしないだろうかと思って心配していたんだからよ。）［土］

〈連体非過去形〉

動詞の連体非過去形は断定非過去形と同形である。

〈連体過去形〉

動詞の連体過去形は断定過去形と同形である。

〈中止形〉

多段型動詞は基幹音便形に、一段型動詞は基幹に、「来る」はキに、「する」はシに接尾辞テが後接する。音便のあり方は断定・連体過去形と同じである。中止形は、節連結のマーカーとして用いられたり、複合述語の前部要素の形式として用いられたりする。

・此れ干して置いて燃（も）すのさ（これを干しておいて燃やすのさ。）［土］
・大根でも漬て貰（もれ）へてえな（大根でも漬けてもらいたいな。）［土］

〈仮定形〉

（レ）バを後接した形式とタラで終わる形式がある。前者は、多段型動詞は「エ段形＋バ」、一段型動詞は「基幹＋バ」、「来る」は「ク＋レバ」、「する」は「ス＋レバ」となる。一段型動詞や「来る」「する」ではミリャーのようになる場合がある。「来る」の仮定形が命令形にバが後接した形式（コーバ）になる話者もいる。水海道方言では「する」の仮定形はシロバにはならない。タラで終わる形式は、断定・連体過去形にラを付加した形式に等しい。タラのあとにバが後接する形式も見られる。

・与吉（よき）げ隠して置けば何でも有んめえな（与吉に（見つからないように）隠しておけば何でもないだろう。）［土］
・自分でも喰つたらよかねえけ（自分でも食べた方がいいんじゃないか。）［土］
・肉刺（まめ）なんぞ出たらば出たつておとつゝあげいふもんだ（肉刺なんかができたらお父さんに言うものだ。）［土］

〈継起形〉

従属節の事態が起きると主節の事態が起こる継起的連続を表す形式にタックレがある。この形式に先行する形式は多段型動詞では基幹音便形で、一段型動詞では基幹、「来る」ではキ、「する」ではシである。

・俺ら怒つたつ位（くれえ）遁げつちやあから（俺が怒ると逃げちゃうから）［土］

〈否定形〉

多段型動詞はア段に、一段型動詞は基幹に、「来る」はキに、「する」はシに否定接尾辞ネーが付く。否定形自体の活用は形容詞と同じである。

・よきは泣かねえようつてなあ（与吉は泣かないようってな。）［土］
・来（き）なくなつちやつて困つたな（来なくなっちゃって困ったな）［土］
・幾ら持（もつ）てたつて構やしねえ（いくら持っていたってかまいはしない。）［土］

〈使役形〉

多段型動詞はカカセルなど基幹ア段形（カカ）にセルを付し、一段型動詞・「来る」はミラセル、キラセルなど基幹にラセルを付す。「する」はサセルとなる。使役形は一段型動詞に準じた活用をする。なお、一段型・「来る」の～ラセルは、現代の伝統方言話者が用いている形式だが、『土』にはこの形態が見られず、一段型動詞には～サセルが用いられている。

・オラ　アレコト　オジチャンゲ　バケラセトイタ（俺は彼をお祖父さんに甘えさせておいた。）［佐々木 2004］
・オメ　アレゲ　ケーヤクショ　カカセタ（お前は彼に契約書を書かせた。）［佐々木 2004］
・俺らも仲間入させてもらえてもんだ（俺たちも仲間入りさせてもらいたいものだ。）［土］
・えゝから、よきげ嘗めさせろ（いいから、与吉に嘗めさせろ。）［土］

〈受身形〉

多段型動詞はカカレルなど基幹ア段形（カカ）にレルを付し、一段型動詞・「来る」はミラレル、キラレルなど基幹にラレルを付す。「する」はサレルとなる。受身形は一段型動詞に準じた活用をする。

・さうえ処（とこ）他人（ひと）に見られたらどうしたもんだえ（そういうところを人に見られたらどうしたものだろう。）［土］
・借りた丈の給金はみんな取つくる返（け）えされんのよ（借りただけの給与はみな取り返されるのよ。）［土］

〈可能形〉

多段型動詞はカケルなど基幹エ段形にルを付す形、一段型動詞・「来る」はミラレル、キラレルなど基幹にラレルを付す。これらは一段型動詞に準じた活用をする。「する」の可能形はデキルであり、ここだけ補充法となっている。

・入（へえ）つちや越せめえか（入ったら越せないだろうか。）［土］
・迚（とつて）も助かれめえ（とても助からないだろう。）［土］
・忘らんねえもんだかんな（忘れられないものだからな。）［土］
・来（き）らんめえつて云つたあ（来られないだろうって言った。）［土］
・俺（おら）がにやさういにや出来ねえんだもの（俺にはそういうふうにはできないんだもの。）［土］

〈継続形〉

継続形にはテル、テタを用いる。テに先行する形式は多段型動詞の場合、基幹音便形である。一段型動詞では基幹が、「来る」ではキが、「する」ではシがテル、テタに先行する。テルおよびテタは「ている」「ていた」に由来する形式である。とりたて助詞がテに後接する際には、存在動詞エルが顕在化する。

・ヨンデル（読んでいる）
・ヨンジャ　エル（読んではいる）

この方言では状態動詞には継続形が存在しない。継続形の意味解釈は動詞の意味に依存する。動作動詞と達成動詞では継続形は進行と解釈される。

・ウタッテル（歌っている、進行）
・テガミ　カエテル（手紙を書いている、進行）

到達動詞は、瞬間的な変化を表す場合、継続形が結果状態を表し、瞬間的でない変化を表す場合、結果状態と進行の両方を表す。

・サラ　ワレテル（皿が割れている、結果状態）
・コオリ　トケテル（氷が溶けている、結果状態／進行）

〈希望形〉

希望形の形成には接尾辞テーを用いる。この接尾辞は共通語の「たい」に対応する。多段型動詞と「来る」「する」はイ段形にテーが後接する。一段型動詞では基幹にテーが後接する。テーは形容詞型の活用をする。

・おつうが行きてえつちもんだから（おつうが行きたいというものだから。）［土］
・俺ら汝等（わツら）げみじめ見せてえこたあ有りやしねえんだから（俺はお前たちに惨めな思いをさせたいことはないんだから。）［土］

〈のだ形〉

ノダ文の述部では準体助詞「の」に由来するンと

コピュラ（学校文法の「断定の助動詞」）のダを組み合わせた要素ンダが動詞に接続する。多段型動詞は断定・連体非過去形および断定・連体過去形がンダに先行する。一段型動詞と「来る」「する」は断定・連体過去形がンダに先行する点では多段型動詞と共通だが、非過去形が含まれる場合は断定・連体非過去形からルを削除した形式がンダに先行する。ルで断定・連体非過去形が終わる多段型動詞の場合も同様にルが削除された形式が用いられる（トンダ「とるのだ」）。ただし、『土』ではルが削除されない形式も見られる。

・此りやおつうげやつて置くんだ（これはおつうにやっておくんだ。）［土］
・今朝は芋の水氷つたんだよ（今朝は芋の水が凍ったんだよ。）［土］
・姉が処に居るんだぞ（姉のところにいるんだぞ。）［土］

2. 形容詞・形容名詞述語・名詞述語の活用の特徴

【形容詞】

この方言の形容詞の活用型は 1 つである。

〈断定非過去形〉

形容詞の非過去形は断定と連体が同形である。エが語幹に接続する形式をとる。エと先行する母音が融合する場合がある。表では非過去形は断定と連体の両方でアカエだが、アケーと発音されることもある。

〈断定過去形〉

形容詞の断定過去形は、語幹に-kar を付けて拡張したものに過去接尾辞タを後接した形式と過去接尾辞ケを後接した形式がある。

・ンマカッタ／ンマカッケ（うまかった）

〈推量形〉

形容詞の推量形は、アカカッペなど語幹に-kar を付けて拡張したものに推量接尾辞「ペ」を接続した形式をとる。関東地方には千葉県（とりわけ南部）のように形容詞の非過去形アカイ、アケーなどに推量接尾辞「ペ」を接続する地域もある。

〈否定推量形〉

否定推量形は、他の品詞と同様メーを用いて形成する。形容詞の場合、語幹に-kar が後接した形にメーが付いて「アカカンメー」などとなる。

〈連体非過去形〉

形容詞の連体非過去形は断定非過去形と同形である。

〈連体過去形〉

形容詞の連体過去形は、断定過去形と同じ、語幹に-kar を付けて拡張したものに過去接尾辞タを後接した形式である。断定過去形のケを後接した形式は、連体過去形としては使われない。

・ンマカッタ　サケ（うまかった酒）

〈中止形〉

中止形は語幹にクを接続したものとそのあとにテを付けたものがある。

クを接続したものは、形容詞を副詞にする際に用いられるほか、否定形の述部にモなどのとりたての助詞が入る際にも用いられる。

・夜明にひどく冷々したつけかんな（夜明けにひどく寒かったからね。）［土］
・俺らさうい噺ぢや聞きたくもねえ（俺はそういう話では聞きたくもない。）［土］

〈仮定形〉

この方言の形容詞の仮定形には、共通語と同様にケレバを語幹に接続した形式の他に、非過去形にケレを接続した形式（アカエケレ）と過去形にックレを接続した形式（アカカッタックレ）がある。ケレはクレと発音されることがあり、ックレもッケレと発音されることがある。この二つは、古典語の形容詞の已然形から生じたものと思われ、異形態の関係にあると考えられる。三つの仮定形の意味的な区別については不明である。

・そんでなけれ耳引張つてやれ（そうでなければ耳を引っ張ってやれ。）［土］

〈否定形〉

水海道方言では形容詞語幹にカが接続した形式に否定のネーが後接する。なお、アカカネーなど～カネーの形は述部にとりたての助詞が現れない場合にだけ用いられる。とりたて助詞が用いられる際には、先に述べたように「語幹-ク」の後にとりたての助詞が付く。〈中止形〉の最後の例を参照されたい。

〈なる形〉

「なる」に先行する形式は中止形と同形、すなわち語幹にクを接続した形式である。

・俺がにや胸が悪くなるやうだな（俺は気持ち

が悪くなったようだ。）［土］

〈のだ形〉

ノダ文の述部に形容詞が来る際には、形容詞の非過去形および過去形にンダが接続する。ンは準体助詞ノから派生した形式である。茨城県内には神栖市波崎方言のようにノダ文の述部に準体助詞を必要としない方言もある（波崎方言では「赤いのだ」はアカイダ）。現代の水海道方言は準体助詞を必要とする点で共通語と同様である。しかし、100 年ほど前には以下の例のようにノダ文の述部に準体助詞がない例も存在した。

・歯も強（つえ）えだよ（歯も強いんだよ。）［土］

【形容名詞述語・名詞述語】

〈断定非過去形〉

形容名詞述語と名詞述語は非過去形で連体と終止の区別がある。断定形はコピュラのダが形容名詞および名詞に接続する形式をとる。

〈断定過去形〉

共通語では過去形で形容名詞述語と名詞述語が同形になる。一方、水海道方言では、両者は完全に同じ形式ではない。断定形は形容名詞および名詞にダッタが後接するかたちとダッケが後接するかたちがあるが、連体形ではダッタが後接するかたちしかない。

・ソータコト　スンノ　{ヤダッタ／ヤダッケ}（そんなことをするのは嫌だった。）

〈推量形〉

形容名詞と名詞述語の推量形は、コピュラ「ダッ」に推量接尾辞ペが後接した形式である。

・余つ程の年齢だつペ（よほどの年齢だろう。）［土］

・無理ダッペ（無理だろう。）［佐々木 2004］

〈否定推量形〉

否定推量形は、他の品詞と同様メーを用いて形成する。メーに先行する形式はコピュラの中止形とトピックのワと存在動詞が融合した=zjar-が形容名詞または名詞に後接した形式である。

・容易ぢやあんめえよ（簡単ではないだろう。）［土］

〈連体非過去形〉

連体非過去形は、形容名詞の場合ナが接続し、名詞の場合ノが接続する。

〈連体過去形〉

連体過去形では、前述のとおり、形用名詞・名詞にダッタが後接する形が使われる。

・ヤダッタ　コト（嫌だったこと。）

〈中止形〉

形容名詞と名詞にデが後接した形式が中止形である。

・そんで又行く筈で前借（さきがり）少しして来たんだ（それでまた行く予定だったので前借りを少ししてきたのだ。）［土］

・心配（しんぺえ）で仕やうねえ（心配で仕方ない）［土］

〈仮定形〉

この方言の形容名詞述語および名詞述語の仮定形は、形容名詞および名詞にダラが後接したかたちをとる。

・大変（たえへん）だらえゝぞ（大変なら（やらなくていいぞ）［土］

・俺れ卯平だら槍で突つ刺（ぷ）してやんだ（俺が卯平なら槍で突き刺してやるんだ）［土］

〈否定形〉

宮島（1961）は形容名詞と名詞にジャが後接する形式に否定接尾辞が後接するとしている。しかし、「土」には形容名詞あるいは名詞にデが後接する形式が否定接尾辞に先行する例もある。

・今夜でなくつてもえゝや（今夜でなくてもいいよ。）［土］

・汝（われ）ばかしぢやねえんだから（お前だけではないのだから）［土］

〈なる形〉

形容名詞と名詞にニが後接した形式がナルに先行する。

・癖になつから、みつしら懲りらかした方がえゝ（癖になるから、しっかり懲らしめた方がよい。）［土］

〈のだ形〉

茨城県内には神栖市波崎の方言のようにノダ文の述部に形容名詞や名詞が含まれる際に準体助詞を必要とせずシズカダダ（静かなのだ）やヤスミダダ（休みなのだ）のような形式になる方言もある。水海道方言は、ノダ文の述部に形容名詞や名詞が含まれる

際に準体助詞が必要となる点では共通語と同様である。また、このような場合に名詞に直接後接するコピュラが形容名詞でも名詞でもナになる点でも共通語と同様である。形容詞では、準体助詞のないノダ文の述部が『土』に見られたが、形容名詞と名詞述語の場合はそのような例は『土』にも見当たらない。

用例出典

土：長塚節（1987）『土』春陽堂（朝日新聞掲載は1910年）

佐々木 2004：佐々木冠（2004）『水海道方言における格と文法関係』くろしお出版

参考文献

佐々木冠（2004）『水海道方言における格と文法関係』くろしお出版

佐々木冠（2011）「水海道方言：標準語に近いのに遠い方言」呉人恵編『日本の危機言語』北海道大学出版会

田口美雄（1939）「方言」茨城県師範学校・茨城県女子師範学校編『総合郷土研究』茨城県

宮島達男（1961）「方言の実体と共通語化の問題点 6 福島・茨城・栃木」東条操監修『方言学講座第2巻 東部方言』東京堂出版

読売新聞社（1967）『茨城の民俗』鶴屋出版部

（佐々木 冠）